

優しさのリレー

金賞 藤間中学校 2年 木田 翔子

「また、飲酒運転の事故か。」

正直私は、そう思ってしまった。今年の七月に、千葉県八街市で起きた、小学生の列にトラックが突っ込み、小さな子どもが亡くなった事故。運転手は、お酒を飲んだ状態でトラックを運転していた。

最近、このようなニュースが後を絶たない。次から次に、身勝手な大人の運転の犠牲に、子どもがなっている。

小さな命は、一つしかない。小さな子どもの大きな未来は、たった一つ。

それなのに、私は「またか。」と思ってしまった。奪われた命は、一度きりを生きていた。命の重みを、私は軽く見ていた。

ところが、母は違った。

一緒に、夕食を笑顔で食べていたのに、事故のニュースが流れた途端、厳しい顔になり、テレビを見て、こう言った。

「信じられない。許せない。」

と。

私ははっとして、思わず母の顔を見つめた。小学校の教師である母は、子どもにかける思いが、誰よりも強いのだと、このとき感じた。

しかし、それではいけない気がした。車を運転する全ての大人が、自分のハンドル操作で、小さな子どもの未来を奪ってしまうことがある、という意識を持たなくてはいけないと思う。私のように、大人たちが、流れてきた事故のニュースを「またか。」「かわいそう。」「ひどい。」で聞き流しているだけでは、事故は繰り返し起こるだろう。一人一人が自分の運転に置き換えて、当事者意識を持たなければ、事故も、危険な運転も、きっと減らない。

最近では、平気で、スマホをいじったまま車を発進させる人、横断歩道で歩行者側が青なのに、かまわず猛スピードで突っ込む車などを、テレビでよく見る。運転手は、簡単な「きまり」が守れていない。

歩いたり、自転車に乗っていたりする子どもは、きちんと「きまり」を守っている。それなのになぜ、危険な目に遭うのか。ルール違反をしていない方が、なぜ、命を落とさなければならないのか。

子どもがルールを守れるのだから、大人だって守れるはずだ。必要なのは、先ほど述べた、自分のハンドル操作への「意識」を変えること、そして、温かな「気持ち」を持つことだと、私は思う。

自動車はとても便利だけれど、常に危険と隣合わせだ。少し油断をして、「きまり」を破った運転をしようとするれば、事故は目の前だ。「ちょっとなら…。」「前も大丈夫だったから…。」という誘惑に負けない、強い意志でハンドルを握ってほしい。

緊張感を持つことと同じように、まわりへの、温かくて優しい、思いやりの心を持つことも大切だ。自分がいかに目的地に早く着けるか、いかに楽に運転ができるか、ということばかり考えていたら、まわりのことは見えなくなってしまふ。

左折や右折をする際、横断歩道に差しかかったら、「人は見えないけど、見えないところに子どもがいるかも。」と歩行者を気遣ったり。高齢者マークの着いた車の後ろになっても、「遅くても、大丈夫。安全運転だ。」と優しく受け止めたり。当たり前のことかもしれないが、まわりを見るときは、小さなことで良いのだ。言葉を交わさなくても、思いやりのある運転をされた側には、運転手の優しい気持ちが、きっと届いていると思う。

私は、自転車に登下校する際、優しい大人にたくさん出会う。私の通学路は、横断歩道のない、広い道路を渡ったり、ブロック塀で見通しが悪くなっている十字路を通ったりと、危ない場所が多い。それらの場所で、車が来たので止まって待っていると、どの車も止まって、運転手さんが、「行っていいよ。」と手で合図をしてくれる。優しくされるたびに、どう伝えたら良いか分からないほど、大きな感謝が、あふれてくる。

しかし、ふと「自転車も車両なんだから、止まってみるのもありじゃないか。」と思った。私は、先に合図を試してみた。すると、運転手さんも、やはり合図をした。けれどもう一度私がやると、笑って車を発進させていった。

率直に、いいなと思った。優しい運転をする人がいると、その優しさを受け取った人が、次、違う人に優しさを送る。この優しさのリレーがつながれば、一人一人が思いやりの心を持つようになっていく。そうすればきっと事故や事故で失われる命も、減っていく。

交通ルールを守り、まわりを思いやって運転している大人がたくさんいることは、生活していてとても感じる。しかし、ほんの少しの大人の、ほんの少しの気の緩みで、奪われる未来があることを、忘れてはいけない。

まずは、まわりを見ることから。それが、優しさのリレーのスタートだ。